

海の森づくり推進協会「アカモク研究会」のご案内

関東湾 初！！、次世代アカモク育成技術移転事業

ご挨拶：

ご存知のように、海が変わる中、水温に耐える新しい海藻育成が喫緊の課題となっています。本年6月に開催された第17回海の森シンポジウムでは、昨今注目が高まるアカモクを取り上げ大変好評を得ました。そこでこのたび、シンポジウムの成果を発展させ新しく「アカモク研究会」を発足させることとしました。

既に千葉県の公的関係機関や漁協からも了解をいただき、これまで、試みられなかった東京湾でのアカモク養殖技術を研究会が中心となり千葉県鋸南町勝山漁協に技術移転を致します。

また「アカモク研究会」の指導助言に基づき種苗生産実験を展開し、今後この地域での出荷拠点、はたまた製品開発をも含む漁協との協働体制を確立しながら地域の活性化に貢献していくことを目的としています。

背景：

近年の地球温暖化は、日本沿岸の生物相を改変させ、沿岸を覆っていた大型海藻が激減。磯焼けが進行しサンゴ類が北上しておりますが、同時に、南方系の海藻も北上しております。一方このような状況下でも、海水温の変動に耐えるホンダワラ類のアカモクは、まだ多くの沿岸に大きな藻場を形成している所が見られます。さらに、従来繁茂していたホンダワラ類が環境の変化で消えた後、アカモク群落が発達した所も見られます。

そして近年、アカモクの生殖体の粘質性や機能性成分の多さが注目され、生殖体部位とその周辺部の葉体をすりつぶした粘性のある食品が、全国的に海藻食品としてブームを起しております。

一方で天然のアカモク資源は枯渇が懸念されており、アカモク養殖が切望されている反面、本格的な事業化までは進んでいないのが現状です。そこで、東京湾を拠点にして、アカモクの養殖事業を推進させながら、その基盤となるアカモク群落の拡大につなげる事業が期待されています。

アカモク林の造成事業：

良質なアカモクが育成されるには、周辺に良質なアカモク林が必要であります。潮流などの海況とともに、施肥も大きな効果があると思われます。また、東京湾は、栄養塩が豊富であり、不足気味の鉄分の効果が、他海域より、顕著に効果が出る可能性も期待できると思います。

アカモク養殖漁業者は、良質なアカモクが育つことで、そこからの収益を施肥への積極的投資へ回すことが可能になります。アカモク養殖の拡大が、生産者と施肥企業との共同事業を生み、養殖と施肥の広がりによる相乗効果で、東京湾にアカモク林を拡大させ、海域の清浄化、魚介類の増大へつながることが期待されます。

東京湾の事例が成功すれば、全国展開ができれば。

そこで、東京湾と瀬戸内海を拠点にして、アカモクの養殖事業を推進させながら、その基盤となるアカモク群落の拡大につなげる事業が期待されます。

アカモクの加工技術の開発：

現在、アカモクは、冷凍保存をして流通しています。滅菌や殺菌技術などにより、常温での流通が可能になれば、より一般的な食材になる可能性があります。それらの研究開発の必要も求められています。

アカモクの薬理的効果：

アカモクの薬理的な効果は、かなり進んでいますが、コンブやモズクなどに比べ、研究報告が少なく、この分野での研究の推進や広がりが必要です。

今後の予定：

アカモクはホンダワラ類の海藻ですが、いわゆるモク類の海藻は数多くあり、その見分けが一般にしにくい難点があります（知見が必要）。

そこで東京湾、千葉側に位置する鋸南町勝山漁協地先で育つアカモクを（アカモクは12月から1月にかけて成長）、1m位成長したところで、我々専門家が選別、刈り取りを行い、これを漁協で沖だした生け簀でロープに刺し込み生育させます。

3月頃からは間引き収穫を行います。通常3月～4月にかけて成熟・抱卵に入りますがそれを刈取り、幼胚を種苗生産用として陸上タンクで飼育種取を実施、越夏させ翌年の種苗とします。生産されたアカモクの利用は漁協で加工、あるいは引き取り業者に委ねますが、アカモクを使った新しい商品開発も大いに期待されるでしょう！

アカモク研究会事務局：

会長：堀田 健治	海の森づくり推進協会	理事（日本大学名誉教授）
事務局長：大野 正夫	海の森づくり推進協会	事務局長（高知大学名誉教授）
会計：下村 温	海の森づくり推進協会	会計幹事
幹事：松岡 正義	海の森づくり推進協会	理事